

～チェルノブイリとフクシマに想いを寄せて～

「救援関西」発足33年の集い



2024年12月15日(日)午後1:30～4:30

大阪市立総合生涯学習センター (第1研修室) 大阪駅前第2ビル5階

資料代: 800円, 学生・障がい者400円

プログラム

～オープニング～ <歌&ギター> アカリトバリさん

1. <事務局報告> 今年の活動を振り返り 来年に向け～ヒロシマ・ナガサキ,そして
チェルノブイリ・フクシマを結んで, ヒバクシャの人権・補償の確立を求める

2. <お話> 石井ひろみさん (福島原発事故 津島被害者原告団)

「ふるさとを返せ! 津島原発訴訟」経緯と思い

3. 質疑応答 (インタビュー形式) と討論など

原発事故後 13年半を迎えたフクシマでは、トラブル続きの廃炉作業、続く放射能汚染、強行される汚染水海洋放出、健康・医療、賠償・生活再建など課題が山積しています。しかし政府・東電は、事故の責任を取らないばかりか、事故被害などなかったかのように、医療費等減免措置の段階的廃止など被害者支援打切りを進める一方、新潟の東電柏崎・刈羽原発の再稼働準備を急いでいます。私たちはこのような政策を許してはならないと考えます。

「発足33年の集い」では、福島県浪江町・津島から避難を余儀なくされ自宅に帰ることの



できない石井ひろみさんをお迎えしてお話を伺います。津島はかつて人々が苦勞して開墾した浪江の山間の集落。石井さんは、嫁いだ津島の家で代々受け継がれた竈門に、毎朝、火を入れるたびに「ふるさと」を感じたと言います。農作業、祭りや行事を通じて地域の人々とのつながりを大切にしながら暮らした事故前の津島。

3.11 東日本大震災に伴う福島第一原発重大事

故の発生にもかかわらず、国や東電から浪江町には汚染や避難指示に関する一切の連絡がなく、町は独自の判断での町民避難を強いられました。3月12日、人口1400人の津島は、沿岸部から8000人を超える避難町民を受け入れました。しかし、原発が次々に爆発し、放射能プルームに覆われる下で、町は3日後には津島からも避難を決断。そして、津島は高汚染の「帰還困難区域」となり、住民は未だにふるさとに帰れません。そのような中で、「津島地区福島原発 事故の完全賠償を求める会」を結成、さらに国・東電に事故の責任を問い、「原状回復」を求めて「ふるさとを返せ！」と訴訟を起こすに至った経緯、石井さんの思いや現状をお聞きします。ご参加ください！

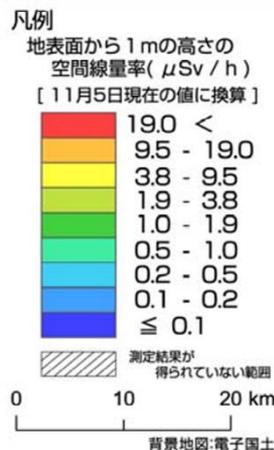
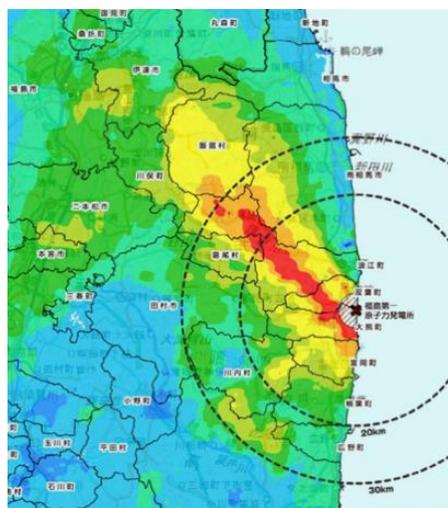


帰還困難区域に指定され、今も住民が住めない浪江町津島地区 = 朝日新聞社

石井ひろみさんのプロフィール



1949年、北海道美唄市生まれ。「通勤族」の父と共に、福岡・大阪・兵庫・東京・神奈川に転居。学生時代にアルバイト先で夫と出会う。1970年、日本体育大学女子短期大学保育科卒業、同校図書館勤務。1971年、退職して結婚、津島住民となる。2000～2004年、津島公民館館長在職。2011年、東日本大震災・福島第一原子力発電所事故で被災。2017年まで、子供宅・実家・避難所・みなし仮設・中古住宅等を経て福島市に家を建て現在に至る。



出典：原子力規制庁 東京電力福島第一原子力発電所周辺の航空機モニタリング(2011年11月時点)

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

<問合せ> 電話：072-253-4644(いのまた), 0797-74-6091(たなか), e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp